

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです

一生懸命働けば、より短時間で役割にぶつかる。そうすれば素敵な人生になる。

すでに時間は 5 時近くなり、東京タワーの脚は夕闇のなかに溶け込もうとしている。船井幸雄先生が人を惹きつけて離さないのは、誰にでも笑顔で真剣にその人間にとって必要なことを語るからでした。

その時の出会いで話すべきことは何か・・・一瞬のうちに、その一点を考えるのでしょうか。他人から疎まれる人間は、自分が話したいことを、ただしやべってしまいます。そのときの役割を考えることなく。

「なぜ人間は一生懸命働かなければならないのか、わかるか？」その質問も唐突でした。

「人の 2 倍働いてごらん。2 分の 1 の時間で自分の役割にぶつかるかもしれないよ。3 倍働いてごらん、3 分の 1 で自分の役割を見つけられるかもしれない。」

一日でも早く自分の役割が見つかり、その役割に邁進できれば素敵な人生になる。一生懸命働く理由はそのためなのだよと、船井先生は言ってくれました。柔道家で、現在、東海大学副学長を務める山下泰裕さんは、師の条件を「世界の広さを教える人だ」といいます。この世界の広さ、そこに生きる素晴らしさを伝える。この世界にはもっともっとすごい人間、強い人間が必ずいるに違いない。だから一生懸命努力する。その努力が世界に通じる道なのだ、と、教えられる人こそが師なのです。とすれば、間違いなく、その瞬間から船井幸雄先生は私の師になりました。一生懸命働く目的は、素晴らしい人生を実現するためにあるのだと、先生は何のよどももなく語ってくれました。人間が社会に出るときに携えていけるのは、高価な靴でも、靴でもありません。未知の世界に飛び立つ勇気なのだと思います。いま、どれだけの教職者が、父親がこの勇気を語ってくれるでしょう。経営者という、未知の世界に立つ先達、リーダーが語ってくれるのでしょうか？

何よりも、働く目的、働く勇気を語るこそがリーダーの資格だと思います。働く目的は、素晴らしい人生の実現にあります。それは自らの役割に生きる喜びとともにあるものです。いまこそリーダーは、そして親は語るべきなのだ、と、船井先生との出会いの日を振り返るたびに思えるのです。

「人間はね、働くことによってのみ、その役割を果たせるのだよ。じゃ、また遊びにきなさい」

扉の前まで来て、見送りながら肩を叩いてくれました。

「しかし、君は足が太いな。足の太い奴は働き者なんだ。俺も太いだろ！」

ビルの外に立つと、11 月下旬の冷気が漂いはじめました。その時の静かな興奮は、人生で初めての高揚感でした。ニーチェの言う。“生の高揚”とはこんなことかと思ったものです。人間には生きる目的がある。そして、人間には天与の役割があるのです。あるのなら、見てみたい、心底そう思いました。

人間はどれだけ生の高揚感を与えられたかが、幸福の裁量を決めるように思います。

“よし生きるぞ！ よし明日も頑張るぞ”そんな高揚感を、ある年齢から今度は与える立場に立たなければなりません。「若いうちは、テイク&テイクでいいよ。でも 30 代になったらギブ&テイクにならないとね」

「そして 40 代の中盤になったらギブ&ギブを目指すことだよ。ところが、いつまでもテイク&テイクの人間もいるからね」誰かに何かを与えられるとしたら・・・それは、生きる高揚感こそ大事ではないかと船井先生に教えられました。果たして何人に、生きる高揚感を与えられたでしょうか？反省することしきりです。

その晩、私は船井幸雄先生のもとに行きたい！と切実に思いました。自分の役割を探したい、という熱い思いが体の底から湧いてきたのです

柔道家で東海大学の副学長の山下氏は、師の条件を何と言っていますか？

()